

2014年度科学基礎論学会秋の研究例会ワークショップ

「知覚の哲学の可能性と意義を認識論的側面から探る」

オーガナイザー：山田圭一（千葉大学）

提題者：源河亨（慶應義塾大学）

笠木雅史（大阪大学）

戸田山和久（名古屋大学）

企画の主旨：

知覚は古来より、存在論・認識論・現象学・心の哲学など、哲学のさまざまな領域において重要な地位を占めてきた。しかしながら、20世紀の後半からこのような伝統的な知覚についての問題に加えて、知覚経験の現象的性格や志向性に焦点を合わせた独自の問いが立てられるようになってきた。そして、それらの問いに対応する理論や分析手法や研究業績などが蓄積されていき、現在新しい「知覚の哲学（Philosophy of Perception）」のパラダイムが確立しつつあると言える。

本ワークショップでは、この夏に知覚の哲学についての日本で初めての教科書としてフィッシュの『知覚の哲学入門』が刊行されたのに合わせて、改めてこのような現代の知覚の哲学がもつ可能性と意義について検討してみたい。この検討はさまざまな角度から可能であるが、今回は認識論的観点からこの問題を考察してみたい。

もちろん、従来から知覚は認識論において重要な地位を与えられてきた。われわれが世界について知るの基本的には知覚を通じてであり、この意味において知覚経験は世界についてのわれわれの信念を知識へと昇格させる役割（たとえば、「正当化」の役割）を果たすことが期待されてきた。しかしこれを逆の観点から問い直し、「世界についての知識を与えるために知覚経験はどのようなものでなければならぬか」という問いを立てるとき、知覚の哲学の課題が立ち現れることになる。今回は、このような認識論と知覚の哲学の交差する地点で問題となっている知覚経験の「認知的侵入可能性」について、知覚の哲学と認識論のそれぞれの研究者の観点から考察してもらう。

以上の点が個別の問題における知覚の哲学と認識論との交差点であるとすれば、今回考えてみたいもう一つの観点は、もっと一般的な問いにかかわる。それは、「認識論の自然化の流れのなかで知覚の哲学にどのような固有の研究領域が残されるのか」という問いである。この問いは、「知覚状態がほかの心的状態や認知状態とどのような点で区別されるのか」という点で知覚の哲学に固有な研究領域そのものを改めて問い直させる問いであるとともに、「知覚の哲学は、（たとえば、認識論や心の哲学から）独立した研究領域たりうるのか、もしもたりうるとすれば、その独自の研究課題とは何か、あるいは、独立させることのメリットは何か」などといった知覚の哲学の根本的な成立条件をも再検討させる問いでもある。

以上のような基本的な問いの検討を通じて、知覚の哲学の研究者の側から知覚と認識のどのような関係が知覚の哲学にとって重要な問題となりうるのかを明らかにしてもらおうとともに、認識論の研究者が知覚の哲学に対してどのような可能性と意義を見

いだしうるのか、という観点からそれぞれ論じてもらい、この双方向からの考察を通じて、知覚の哲学と認識論との実りあるコラボレーションの可能性を探ることが本ワークショップの目指すところである。